

仏像づくりの手法は奈良、平安、鎌倉の各時代に急速に技術導入が行われ、ひとつの黄金時代を築く。奈良時代にはすでに現代のロストワックス製法に通じる蠟型鑄造やグラスファイバーを思わせる軽量の乾漆造りなどの技術もさかんに使われていた。そうしたなかで鉄を素材とするいわゆる素朴な鉄仏がつくられるようになっていったのは鎌倉に入ってからである。仏教美術という視点からは、稚拙ともいわれる鉄製の鑄造仏がつくられていった背景にはどんな事情があったのだろうか。鉄造では日本最古の銘が打たれている栃木県の薬師如来座像に目を向けつつ、その周辺に想いを巡らせてみる。



鹿沼市上石川薬師堂の鉄造 薬師如来座像。右手の法印と左手の薬壺が火災で失われている（県指定有形文化財）。

# Steel 鉄の点景 Landscape



## 信仰の象徴となった鉄

# 鉄仏

### 日本最古の鉄仏

素朴な顔だち。くっきりと残った鋳物の合わせ目。そして長年の風雪のなかで磨かれた錆肌。関東・東北から尾張にかけて残る100体に満たない数少ない鉄仏のなかで、写真で紹介するものは、在銘鉄仏中、国内ではもっとも古い（建保6年／1218年）といわれるものである。ところは栃木県鹿沼市の上石川、のどかな田園風景のなかに鎮座している薬師如来の座像である。

背中の銘には、奉□藤原則吉」右□□大旦那藤原則安□」紀国□」紀□友」大工坂本」□□小工□□□□」建保六年 二月廿三日 彼岸上旬とある。地方豪族であった藤原氏が地方の鋳物師につくらせたものであることを伝える内容である。

いく度かの火災にあったために、両の手は失われ右膝も欠けており、全体の腐食も進んでいる。像高50.8cmの小像だが、むくの鉄造のため83kgの重量がある。鉄仏の特徴であるバリと、錆の剥落によって生じた独特の陰影が、「都ぶり」の洗練された仏像とはまるで異なった味わいを醸し出している。背中に生じた空洞は鋳造の際、芯のまわりの湯流れが十分でなかったためであろうか、おそらく技術的にも素朴な手法でつくられているのだろう。

### 東国の美意識を写す素朴な仏像

鉄仏は、鎌倉時代になって東国を中心につくられるようになった。中国では隋・唐・宋を通じて鉄仏がつけられたのに対し、日本では鎌倉と室町にかぎられ、地域的にも尾張を境として西日本にはほとんどないという。一般にはこの時代に鉄仏がつくられるようになったのは、鉄の剛毅な存在感が当時台頭してきた武士の趣向に合っていたためだと説明されるが、東北の製鉄文化とのつながりを指摘する意見もあるようだ。西日本に鉄仏がないということは、無骨な鉄の仏が、都ではさして価値を認められなかったことを意味しているのだろうか。

大同工業大学名誉教授の井塚政義氏は、鉄仏と鉦彫り仏との地理的な分布の一致を指摘している。鉦彫り仏は、わが

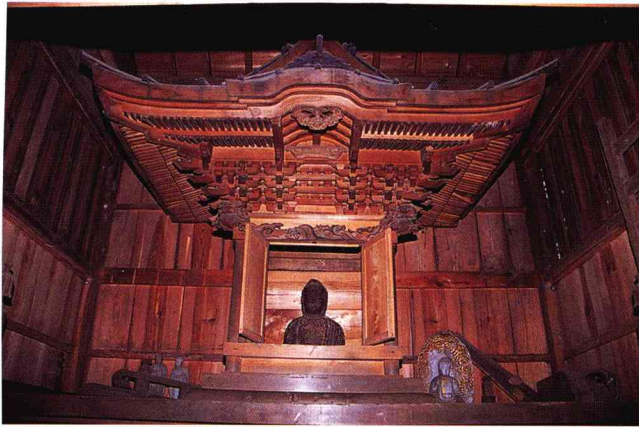


建保6年とある銘は、在銘の鉄仏中もっとも古い。文字は型に彫りこんだものらしく、鏡像になっている。



型を合わせた部分に錆バリがはっきりと残っている。顔の造作も素朴で飾りがない。





堂に納まった薬師如来座像。

国の仏像の主流である木彫仏像のなかでもユニークな存在で、木を刻んだ鈍の刃跡が油絵の筆致さながらに脈打って、素朴ななかにも独特の様式を感じさせる。むろん洗練というよりも、刃跡の躍動感や木の素材感、素朴な飾らない味わいに魅力が見出せる仏像である。13世紀頃といえば、わが国に禅宗が入ってきた時期だが、鉄仏や鈍彫り仏は、当時の新思潮である禅の美意識と合い通ずるものを体現していたのだろうか。そして禅を受け入れていったのが新興勢力である武士層だったことはよく知られているとおりである。

その一方で鎌倉といえば、運慶や快慶に代表される写実的で高度な技量をもった仏師たちを多く輩出した時代でもある。こうした都の権力機構の中枢近くで大陸からの影響を受けつつプロフェッショナルな仕事をした仏師たちに対し、鉄仏の作者たちはむしろ地方の半農半工とも推測される素朴な技術をもって、身近な鉄という素材で自分たちの生活に密着した信仰の象徴たるべき像をつくっていったと考えられるかもしれない。

岡倉天心は『茶の湯』のなかで、禅の美意識を「未完の美」とあると解説している。究極をいえば禅には仏像は必要とされないというが、詫び寂びにも通ずるような鉄仏の味わいは、当時の時代の雰囲気がある側面で写し出しているのかもしれない。

### 仏教的世界と鉄

法華経きぶつの作仏法には、仏像の素材として七宝、真鍮、赤銅、白銅、白鐵、鉛、錫、鉄、木、泥、にかわ、漆、布などを用いるべきことが具体的に記されている。それはありとあらゆる素材を使って、仏のイメージを描くことの重要性を訴えている部分であり、技術的な巧拙は二の次だという。仏をこの世界に描くことがすべて仏道じょうを成ずることにつながるというわけだ。鈍彫り仏や鉄仏などの素朴な仏像には、いわばその地方の人々の仏教的イマジネーションが切実なまでに込められていたのだろう。

造仏という事業は、天災や社会的混乱などによって乱れた人心を鎮め、社会の生み出すバイタリティをひとつの方向に導



東北自動車道鹿沼インターから車で5分ほどのところにある上石川薬師堂（天台宗・圓滿寺）。

いていく契機、または社会装置として機能してきたケースも多い。有名な奈良の大仏建立のいわれも聖武天皇の即位とともに相次いだ災厄を鎮めることが目的だったといわれる。今日という国家プロジェクトによって組織的な大事業を行い、そのエネルギーを新たな社会建設への呼び水にするという構造はこの頃から存在してきたということだろうか。戦後の日本でいえば、それに相当するような役割を果たすものとしてオリンピックや万博があった。

危機の時代といえる今、造仏事業に相当する時代へのステップとすべき方法論はあるのだろうか。それは大仏建立のようなビッグ・プロジェクトばかりではなく地方豪族や農民がつくった小さな鉄仏や鈍彫り仏のようなものであってもいいかもしれないのだが……。

だいぶ脱線したが、仏像について取り上げたついでに、仏教的世界観の中に出てくる鉄について最後に紹介してみよう。仏教的世界の中心にあるとされるのは須弥山しゅみせんといわれる巨大な山である。その高さは水の上（海拔？）8万由旬（1由旬は40里）、海中にも同じだけ延びているとされる。帝釈天と四天王が住むこの須弥山を中心に、その周囲には七海七山があり、その周りに外海が、外海には四大洲があり、天界の住者が住んでいる。そしてそうした世界の最外周に鉄圍山てつゐせんと呼ばれる鉄の山がぐるり巡っているという。これが一世界である。この世界を千集めたものが小千世界、その小千世界が千集まったものを三千世界という。天文学的な数にのぼるそれぞれの世界の周りを囲んでいるのが鉄の山脈である点は興味深い。鉄はいわば世界を支える器となっているかのように描かれているのである。

現代の天文学は宇宙には千億の恒星が集まった銀河が千億あると説明するが、釈迦は三千世界というビジョンを通じて数量的には現代科学に近いスケールで宇宙を見ていたということになるだろうか。

それにしても三千世界全体では、いったいどれほどの鉄が存在しているのだろうか。

[取材・写真協力：圓滿寺、上石川2区自治会]